

大橋：それでは前半の部に入ります。1 番目のご報告は、上田信本学文学部教授・「21 世紀海域学の創成」プロジェクト研究代表・アジア地域研究所所長から「21 世紀海域学の課題」と題するご報告をいただきたいと思います。上田先生は中国社会史のご専門で『伝統中国』『森と緑の中国史』『トラが語る中国史』『海と帝国』『シナ海域蜃気楼王国の興亡』などのご著書をお持ちです。どうぞよろしくお願い致します。

上田：どうもこんにちは。今回、このプロジェクトの代表を務めます上田です。今回、こういう形でプログラムを進行することができてうれしく思っています。皆さんからいろいろの意見等を伺えるような場にしていきたいと思います。

このプロジェクトは文科省の戦略的基盤整備事業という形で私立大学の研究基盤を形成するという目的のために、年間大体 1 千万円弱の資金を提供していただいて展開をしていくものになります。私自身の報告は少し短めになるかと思いますが、私自身としてのこのプロジェクトの意図やその概要を紹介しながら進めていきたいというふうに思っています。

図 1 には「蜃気楼王国としてのシナ海域王国」というふうに書きました。実を言うと、私が 2013 年 9 月に出版した本があるのですが、こちらの本を書くというのが私自身にとってこの海域学の 1 つの出発点ということになるかと思えます（図 2）。“蜃気楼王国”と名付けたのですが、要するに、いわゆる歴史に名をとどめないけれど、海に何か政権の構想というものがうごめいていたということをしっくり取りたいと思ひまして、こういう名前をつけました。この本の中では東シナ海、南シナ海という形で話を持っていっています。

さて、1 つの話のきっかけとして皆さん「中国航海日」というものが 7 月 11 日にあることをご存知でしょうか？これは 2005 年に中国で施行されました。西暦の 1405 年 7 月 11 日は鄭和の南海遠征の第 1 回目の出帆の日というふうに言われている。それで、ちょうど 600 周年に当たる 2005

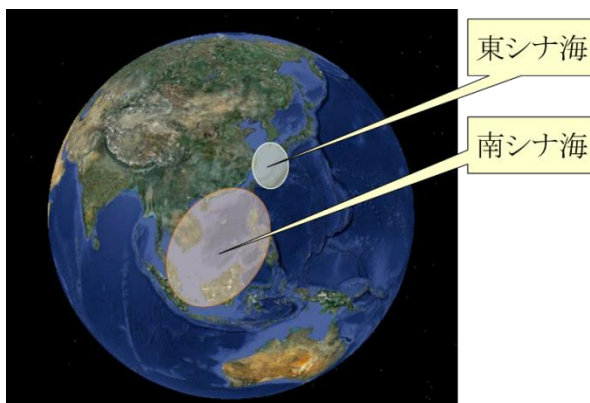


図 1 蜃気楼王国としてのシナ海域王国

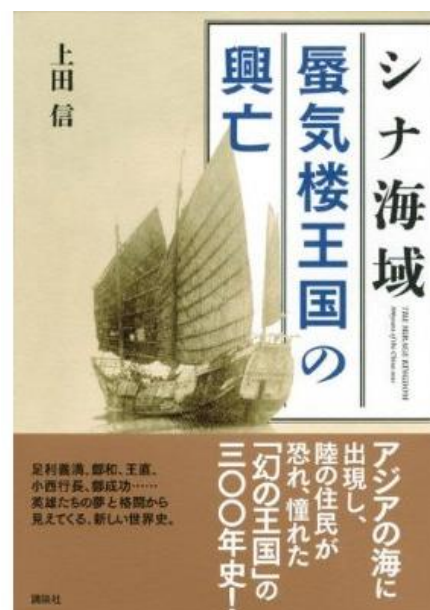


図 2 『シナ海域蜃気楼王国の興亡』

年にイベントが行われたわけです。私自身もこのときに中国の雲南の方にいたのですが、その当時は鄭和の遠征を非常に学術的に検討しようという流れになっていました。今の習近平体制、あるいは胡錦濤の時代からその方向性は見えていましたけれども、今中国の方では「海洋強国」という1つのイベントがこのときに集中して行われるようになっていきます。

一方、ちょうどそれから数日前後しますが、7月の第3月曜日に日本では海の日が制定されています。これはもともと海の記念日と呼ばれていたものですが、そのきっかけは明治天皇の東北地方巡幸の際、灯台巡視汽船「明治丸」によって航海し、7月20日に横浜港に帰着したことになんてということになります。そして、この海の記念日というものが制定されたのが、アジア太平洋戦争の最中の1941年になるわけです。この2つの中国の航海の日、そして日本の海の日、あるいは海の記念日というものが、ある意味で国家的に1つの海に覇権を求めるといふ動きと何らかの関係があるように見て取ることもできます。

さて、先ほど申したように、鄭和の出航から600周年の2005年に、私は中国の雲南にいましたので、鄭和に関する史跡を巡ってみようといろいろと旅をしました。鄭和の故郷は**図3**の矢印で示しました中国雲南省昆陽晋寧県です。滇池という大きな湖があるのですが、そのほとりに鄭和の記念公園というものがあります。鄭和がどういう人物であったかということについては、ほとんど歴史の資料には残されていません。実際に鄭和に会った人物の書いた随筆によりますと、非常に体が大きくて、眉目秀麗な人物であったと書かれています。鄭和の想像の彫像も作られており、その像の眺める先に滇池が広がっています**(写真1)**。



**図3 鄭和の故郷**

この鄭和記念公園という中に、鄭和のお父さんのお墓と言われているものが置かれています**(写真2)**。この墓の形は普通の中国の漢族のお墓とは違うのですが、実を言うとこれはムスリムのお墓の形式になります。本当に鄭和の遺体が埋葬されたかどうかについては、疑問視する旨がありますが、鄭和のお墓も南京の方にあります。その墓も大体似たようなムスリムの墓の形式をとっています。



**写真1 鄭和像**〔上田信 撮影〕



**写真2 鄭和の父の墓**〔上田信 撮影〕

鄭和の父の墓の前に、その没後二十何年かたって建てられた碑文があります（写真3）。その最初のところに「公（鄭和の父親）の字はハッジ（哈只）、姓は馬氏、代々雲南の人であった」と書いてあります。ここのハッジというのは、ムスリムが行わなければいけないことの1つとして挙げられているメッカへの巡礼、巡礼の月にメッカへ巡礼をするということになります。この碑文を読みますと、鄭和の父と父の父（鄭和の祖父）がハッジであるということが書かれていますので、想像ですけれども、鄭和のおじいさんとお父さんはおそらく一緒に連れ立ってメッカに巡礼したと考えられるわけです。



写真3 故馬公墓誌銘  
〔上田信 撮影〕



写真4 鄭和と祖父  
〔上田信 撮影〕

鄭和記念公園には写真4の彫像もあります。下の方でひざの脇に立っているのが恐らく鄭和の幼いころで、海の方を指しているのが鄭和の祖父になるかと思えます。鄭和

にメッカ巡礼の旅の道中であったことなどを話している彫像になっているわけです。鄭和のお父さん、および鄭和の祖父がメッカ巡礼のときにどのルートをとったのかということについては、資料は残っていません。しかし、いろいろな状況証拠から考えて行きますと、海伝って海上からメッカに入るというのが一番可能性の高いルートだと思います。

さて、鄭和の南海遠征は、先ほど言いました西暦1405年7月11日、その当時の明の第3代の皇帝である永楽帝の下で行われました。この当時それほど大きな木造船が造れたのかということについて、造船の専門家から疑問が出されていますけれど、非常に大きな船で船団を組んで行ったと言われていています。15世紀において、鄭和の船が世界最大であったと言えるのではないかと思います。

鄭和の遠征は7回行われました（資料1）。1回目から6回目は永楽帝の下で、7回目は永楽帝が死んだ後に、永楽帝の孫の皇帝のときに行われたものです。このときに1回から3回までは航海から帰った同じ年のうちにまた出帆しています。ところが、4回目以降は航海から帰って2年ぐらい間をおいてから出帆をしている。それだけ準備に時間がかかるようになり、1回目から3回目と4回目から6回目とでは航海の性格がかなり違ったということが想像されます。

このルートですが1回目から3回目は、インドのカリカットを目指して航海をした。その後4回目から6回目は、インド洋の西側というのでしょうか、その方を目指

#### 資料1 鄭和艦隊の7回の航海

第1回	1405年～1407年
第2回	1407年～1409年
第3回	1409年～1411年
+++++	
第4回	1413年～1415年
第5回	1417年～1419年
第6回	1421年～1422年
+++++	
第7回	1432年～1434年



して、アラビアの方の海を目指して行ったということが言えます。7回目はもうそういう形でアフリカの東海岸まで到達をしているという形になります。このように1回目から3回目と、4回目から6回目とではかなり性格が違う。そして4回目以降の航海は、まさにイスラームの領域の中、海域の中で行われたものになり、鄭和の艦隊の中にも多くのムスリムが入っていたということが明らかです。

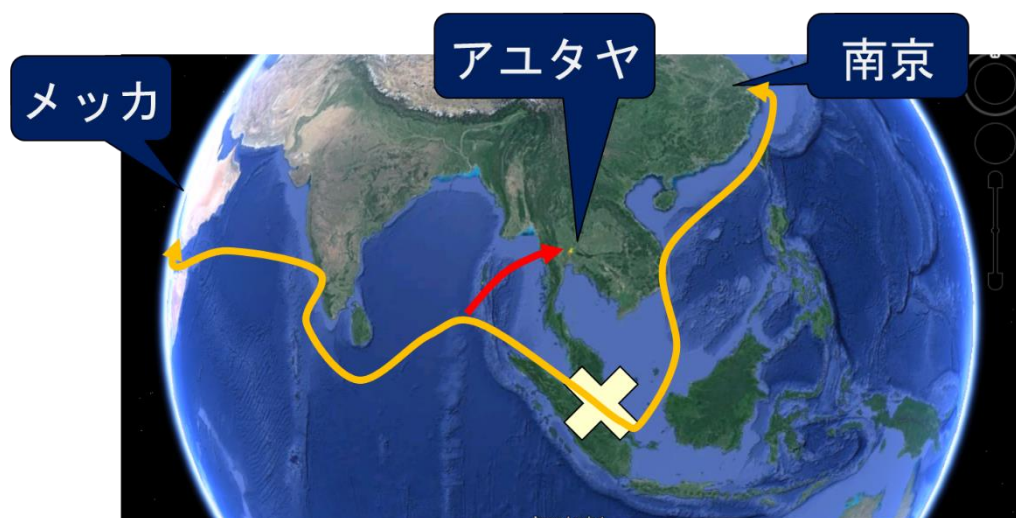


図4 1400年頃の南海の状況

さて、航海の目的ですけれども、いろいろなことが言われています。正史である明史の中などでは、永楽帝がクーデターで倒した第2代の皇帝の遺体が見つからないのは海に逃げたからではないかということで、それを探しに行ったのではないかということが書かれています。しかし明実録などを読んでいきますと、おそらくこれがきっかけではないかという記事が出てきます。それは、1403年に南京にインド洋から来たムスリム、メッカ巡礼者が到着をしたということです。その巡礼者により、マラッカ海峡を船で通過することができないということが、初めて明朝の側に情報として伝えられたらしい。彼らはタイのアユタヤに足止めされていて、たまたま明朝の朝貢を促す使節がアユタヤに到着したときに、その使節の帰路に同行して明朝に帰り着いたと言われています。もともと鄭和のお父さん、おじいさんが航海をした時には、このような海上のルートからメッカに行くことがあったと考えられるのですが、それがここでうまく通過できないという状況が生まれた。そこでタイの西海岸の方に入って、陸路でアユタヤに出るルートを取ったのではないかと思います（図4）。

その原因として、マラッカ海峡に陳祖義という華人の海賊がおり、海の航行を妨げているということが分かってきた。これを何とかしなければいけないというのが、少なくとも第1回目の鄭和の遠征の大きな目的であったのではないかと考えられます。

そして鄭和が行って陳祖義を逮捕したあとに（写真5）、



写真5 捕らえられた陳祖義

〔上田信 撮影〕

陳祖義に代わってムスリムの華人にこの辺りを管理させる態勢をとったのではないかとというのが、私が先ほど挙げた本の中で掲げた1つの推測になります。ある意味でこのマラッカ海峡に遠征の拠点置き、ここを1つのルートとして確保するということが行われたというふうに考えてもいいのではないかと。

この遠征ですけれども、おそらく南シナ海からインド洋に抜けるメッカ巡礼のルートが中断されているということに最も強く反応したのは、鄭和自身だったのではないかと私自身は想像しています。鄭和がこれを何とかしなければいけないと考え、自分の主人である永楽帝をたきつけるような形で南海遠征の必要性を訴え、永楽帝の威信を高めるという意図と合致して遠征が成し遂げられたのではないかとというふうに私自身は想像しています。

さて、今回のプロジェクトで私が興味を持っているのは、ジャワのスマランというところです。このスマランには三保洞という鄭和に由来する廟があります（写真6）。この祠はもともとムスリムの1つの宗教施設だったのではないかとというふうに言われており、写真7のようなレリーフがあります。その辺りを実際に歩いて確認をとってみたいというのが、私自身がこのプロジェクトで目的にしているところです。



写真6 三保洞（別名・鄭和寺院）

〔上田信 撮影〕



写真7 ハッジ三保の活動

〔上田信 撮影〕

さて、もう一方ですけれども、日本の状況を考えていきますと、山田長政という人物が念頭に浮かびます。タイで傭兵隊長となり、かなりのポストにのぼりつめた人物が山田長政だということが言われて、彼が実在したのではないかとという岩生成一先生の説に対して、矢野暢先生がそうではないと、存在を疑うというような論争が1980年代に行われました。私自身は山田長政が実在したかどうかということではなく、ここで問題にしたいのは、朱印船で出かけて行ったいわゆる日本人が、彼らが日本という国を背負って出かけたのかどうかということです。

図5は大阪の平野郷出身の商人が仕立てた朱印船を絵馬として確か京都の清水寺に奉納したものです。この船、乗っている人などを見ると、非常に多種多様な服装をしています。1つの船の中にポルトガル人のような人もいるし、中国人のような人もいるし、当然日本人のような人もいるというような、非常に混合している海の世界というものがあつた。この船そのものも、帆の形はポルトガルのナウ船と呼ばれている西洋船の帆を取り入れています。そして、船本体の形は中国系のジャンク船の形を取っているわけです。このように西洋船と中国のジャンク船の特色を取り入れて、その上にさらに日本風のやぐらを上に掲げ、和洋折衷プラス中国の文化も技術も受け入れた船を仕立てているわけです。おそらく山田長政もこういう朱印船でアユ

タヤに渡ったと考えてもいいわけですが、彼がはたして日本というものを背負っていったのかどうかということは、ちょっと問いかけてみたいことだと思います。こういう形で出かけていった日本人が住んでいた町を“日本人町”というふうに言っているわけですが、彼らの意識はどういうものであったのかということをちょっと考えてみたいと思っています。

先ほどちょっと紹介しましたが、鄭和にしても中国を背負っていったというよりは、おそらく彼自身がムスリムの父、祖父がメッカに巡礼したということ



図5 朱印船（末吉船—大坂・平野郷）

1つの誇りにしていた。それが南シナ海を通ってのメッカ巡礼ができないということを鄭和自身が非常に危機感を持ったということがこの遠征の背景にあるとすれば、彼は中華帝国のために遠征したということとは言えないのではないかということが私の今考えていることです。ですので、今の海洋強国ということのシンボルとして鄭和を取り上げると言うことは、歴史を現代の目からここに国家というような枠組みの中で委ねていることにもなるわけですし、例えば山田長政が非常に日本でクローズアップされたのは、アジア太平洋戦争に向けて日本の南進論、南進というものが非常にはっきりしたからという背景もありました。山田長政を果たして日本人の海外雄飛のシンボルとしてとらえていいのかということも、同じように考えていいのではないかということです。

今回のこのプロジェクトは海に生きた人たち、あるいは海にかかわった人たちの視線から、もう一度歴史、政治、文化、そして観光というものを読み解いてみたいというのが大きな目的になります。その中では今、海というものがいろいろな面でクローズアップされています。それを地理的な視点から、先ほど外邦図というものを紹介していただきましたけれども、日本が海外のオランダ、イギリス、フランスなどから摂取した地図などをもう一度編集し直すような形で1940年代に外邦図を作る。さらに日本が軍事的に関心を持っているところについては、航空写真などから地図を作るという形で、この外邦図の全体像ができあがっているわけですが、この外邦図、今から見ますと近代的な開発、インフラ整備が行われる前の、いわゆる原風景というものがこの地図の中に描かれているのではないかということを一応踏まえた上で、鄭和の時代ぐらいから1940年代という歴史的過去、そして現代に向けての流れの中で、その外邦図というプラットフォームに結び付ける。そして現在の政治、観光、そして文化というような情報を今度は現代の今の方から1940年代のプラットフォームにしている外邦図の中に位置づけていく。このように緯度経度という位置情報を手掛かりにして、過去と現在を結びつけて、さらにそれを将来に向けて展望を描いていくと。海の中で政治的な対立が起きている状況を踏まえた上で、これをどのようにしたらいいのかと提言できるようまで持っていければと考えています。

以上、私の方から私がこのプロジェクトの中でやってみたいことを、紹介する形で話を進めてまいりました。どうぞご清聴ありがとうございます。